

し、大阪へ入港しました。病院で一ヵ月治療し、小倉でさらに一ヵ月、京城病院でマラリアも良くなり、山砲第四十九連隊に転属されたが、第四十九師団臨時動員があり、野砲第二十六連隊に編入されて、十九年八月一日召集解除となりました。

滋賀県の田舎へ帰ったら、また召集が来たが、病気が完全には快復せず、即日帰郷となった。

―その間一番辛かったことは何でしたか。

辛かったのは漂流中の時です。半分死んでいました。五日間ぐらいで六人救われたわけですが、駆逐艦の甲板に引き上げられて、安心感でか、三人が死んでしまいました。他の人たちはどうなったのか判らなかつたが。

エレベーターの高射砲陣地では、敵の飛行機が四方から射って来たり、爆撃される。七十ミリの高射砲は十三人で射ったのだが、一回転するのに十九秒かかるのです。そんな中で小隊長が戦死してしまつたし、戦友もたくさん死んだり負傷した。その人たちと離れて、私が先に日本へ帰って来てしまい、今も胸の痛む

ことであります。

比島・ニューギニア船舶工兵の死闘

愛媛県 和田 盛正

―和田さんは、何年徴集で、何処へ入隊されたのですか。

大正九年二月七日、松山市で生れて、昭和十五年徴集ですが、昭和十六年三月二十五日臨時召集され、西部第三七部隊（善通寺）に入隊しました。ですから現役兵とほとんど変わらないのです。

入隊してから広島第七部隊、上海の独立工兵第十連隊安達部隊へ転属。上海の昭和島で約半年間、軍事教育訓練を受けて、九月末に第一中隊第一小隊へ編入、付近でクリーク戦闘などにも参加しました。

―工兵隊ではどのような教育でしたか、工兵にもいろいろ専門があるのですか。

私は召集前は、自動車の製造工場や、神戸の川崎重工業へ勤めていました。野戦工兵は大変酷しい訓練ですが、私の方は船舶の操縦が主で、手旗信号・モールの通信兵をやった。

九月、第一中隊に編入された同年兵は四十五人で、一個連隊で百二十〜百三十人ぐらいです。小隊には六隻ぐらいの船がありますので、一個分隊に同年兵は一、二人ぐらいでした。小隊の指揮は下士官で、分隊長は上等兵ぐらいでした。私の分隊はよい人が多く良かったです。私は通信兵になったのでエンジンはやらなかった。十月に入ってから軍装検査が大々的に行われました。対米戦の噂が流れ、これは本当かなという予感がありました。そのうえ古参兵などの動きもあわただしくなりました。

連隊は南方の方へ行く予定だったのか、沖縄の石垣島の珊瑚礁の海で舟艇の演習がありました。ちょうどその時、私はマラリヤ発熱のために原隊に残っていました。演習を終えて、第二中隊だけが帰ってきて、第一中隊は大連へ行ったとのことでした。

―舟艇というと上陸用舟艇ですか。いよいよ開戦となると、部隊はどんな行動をとられたのですか。

舟艇の小発は各隊一隻で指揮艇です。大発は歩兵を輸送する艇で、両脇からワイヤーで巻いてある前板は、岸に近づいたら降ろし、ここから兵隊が上陸するので、艇はほとんど木造ですから弾が当れば穴があく。

(コレヒドールの時は操縦手のところは鉄板で囲んだ)

十一月三十日までに台湾の高雄に集結の命令が入った。私は第二中隊と一緒に高雄に行って待ったが第一中隊はなかなか来ないので三十日ギリギリに着いた。聞いてみると、大連から宇品へ行き家族と面会して来たとのこと、その時はうらやましく残念にも思いました。

私達の独立工兵連隊は三個中隊編成でしたが、各中隊は歩兵連隊へ配属になるので、第二・第三中隊は何処に行ったかわかりません。

高雄から馬公へ行き、機材等の積込を行い戦争準備をした。十二月六日、馬公を出發した。船団は一万ト

ン級輸送船六隻で、各船には兵員・弾薬・糧秣や我々の舟艇も搭載していました。護衛は巡洋艦や駆逐艦で、出港二日目に宣戦布告をロコミで聞きました。その頃から敵機が偵察に来るようになり、全艦から高射砲を射ったが、砲弾幕は見事なものだったが高度が高いのでなかなか当たらない。

十二月十日、ルソン島北部のピンガに敵前上陸。本船から舟艇を降ろして、歩兵を積んで敵前上陸となったが、はじめての上陸で緊張した。しかし、陸からは大した抵抗もなく歩兵サンを上陸させることが出来てホッとしました。これは第十四軍の先遣隊菅野支隊でした。

日本軍の上陸を知って敵機が一機づつぐらい来て爆弾を落したので本船一隻がやられました。私達の舟艇は銃爆撃を避けて被害はなかったが、本船がエンジンをやられたので、我々の舟艇を載せて高雄へ帰れなくなりました。護衛の高射砲射手がやられ、砲の転把を握った手だけが残って体は飛ばされたことと聞いた。

我軍の駆潜艇が一隻やられ沈没したが、その時の爆風、水柱で攻撃した敵機も翼を切られ墜落したのを見た。空襲は半日ぐらいだったが、初陣ということもあって戦闘の恐ろしさを知らされた。

我々の第一中隊は高雄へ戻ってジャワ作戦へ行く予定でしたが、先程いったように、搭載船が航行不能になったので、そのままルソン島に残るようになった。そこで舟艇隊はリングエン、サンフェルナンド、バタングス、ナスブグ、オロンガボ等の攻撃に参加した。それ等上陸の新しい部隊が来て、それ等の補給もやりました。

―バターン、コレヒドール要塞戦などの上陸作戦の模様を話して下さい。

昭和十七年五月五日、第四師団（淀兵団）井上部隊のコレヒドール島要塞攻撃戦に参加した時は、この世の別れとして「頭の髪や指の爪を残しておけ」といわれ、この戦闘で私も最後かと思いました。軍司令官は本間雅晴中将で、和知参謀長だった。

コレヒドール要塞攻略はバターン半島から歩兵を載

せ要塞に向かう。舟艇の援護射撃があり、それは勇ましいものだった。幸い私達の部隊が第一回目だったので敵が知らずにいた。我々が運んだ日本軍が上陸してから気付き、要塞からバリバリと砲撃や機関銃の攻撃が始まったので、我々は少しは楽だったが、上陸して間もなく「オーイやられた」という声が今でも耳に残っています。

第二回目の上陸は他の舟艇部隊だが、要塞からサーチライトを照らし、バリバリ撃たれ大分苦戦したろうと思う。私達は第一回目で助かったが、私の大発は砲撃で沈められた。舟の右舷に穴があいていたから、バターン半島の友軍の弾だったのではないかと思う。同僚の舟が助けに来ようとしても、敵の砲撃がはげしくなかなか思うようにいかない。私達は海の中をアチラコチラとさまよい、機関銃の音がすると、首だけ海面から出して避難した。やっとのことで救助された時は本当に嬉しかった。

二・三日の戦闘で要塞は陥ち、敵の司令長官ウエンライト將軍を装甲艇でバターン半島へ送った。日本人

では考えられないことだが、將軍はステッキをついて悠然としていた。降伏しても日本人とは違っている。

その後、マニラで約一カ月ほど舟艇を整備して六月六日、ミンダナオ島へ渡り、ダバオで砲第六一七三部隊に改編されました。ここではじめて独立工兵から船舶工兵になったわけです。

一 砲部隊になって、ミンダナオからソロモン作戦はいかがでしたか。

八月二十日、ダバオ発、三十一日、ニューブリテン島ラバウルに上陸、昭和十八年一月十八日、ニューギニアの「ウエワク」上陸ですが、その間に、ガタルカナル島へ行きかけたが途中命令が変わり付近の島で一カ月間、流人のように、我々の隊だけでいた。ラバウル→ショートランド→ラバウル→マダンへ行ったり来たりでした。

(第十七軍司令官が、ガタルカナル島撤退を決意して、第二・第三十八師団に撤収命令が下達されたのは一月十六日と年表にある)

私の軍隊手帳には「セウトランド、マダン、ソロモ

ン諸島において、ムンダ強行上陸、小西部隊上陸戦闘、岡部支隊強行上陸に参加」とあります。

(ウエワクへの上陸は第二十師団の三分の二で、一月十九日、二十三日に第一梯団が上陸と年表にある)

ムンダはガダルカナル島の西北西のニュージョージア島で、輸送船が米潜水艦の雷撃で航行不能となり、司令官は護衛艇に移乗しムンダに進出と、年表で見せてもらいましたから、その戦闘だったのでしょうか。私の当時の記憶は薄れていますが、岡部支隊がマダンで、ウエワクが小西部隊ではなかったでしょうか。

丁度その頃、山本連合艦隊司令長官がブーゲンビルで戦死されたことを知りました。私たちはソロモン諸島で敵機の空襲や大発射といわれる駆潜艇で魚雷攻撃も受けたりするので昼間は出来ないで、何時も夜間航行でした。

ー続いてニューギニア戦では随分苦労されたと聞きましたが、地図を見て説明して下さい。

ニューギニアではサラモアが敵と取ったり取られたりで、第二十師団と第四十一師団が激戦また激戦で、

山が見る見るうちに禿山になってしまふ。我々もそれを海から見ていたが、歩兵への食料は夜、陸へ揚げる。昼は出来ないから。輸送船は港に入れないので、潜水艦でないと運べない。我々の舟に歩兵を載せて潜水艦の荷物を揚げ、大発に積み、我々が運転して陸まで、陸揚げはまた歩兵がやる。

敵が上陸してくるのでラエからマダンへ撤退する山越えの案があつたが、命令が変わり、イチカバチカで岸の近くでなく沖合を航行、ラエからフィッシュファアヘンへ着けた。月夜の晩でした。その時、駆潜艇から攻撃されたが被害はなかつた。そうして、フィッシュファアヘンからまた海上を舟艇だけでマダンへという撤退で、本当に命がけの毎日でした。

昭和十八年九月、ニューギニアのラエにおいて、敵が飛行場を取り返しに来たら応戦せよとのことで、近くの防空壕で待機していました。二箇所あつた防空壕のうち、私たち二十五名の入っていた壕が至近弾を受け、防空壕は潰されました。私は気を失っていました。気が付いた時には「痛い、苦しい」という悲鳴が

聞こえたのです。私は三人重なつた一番上になっておりましたが、体のあちらこちらが火傷と破片創で痛く、気をしっかり持っていなければならぬと、皆で励まし合いました。

助かった防空壕の戦友が助けに来ようとすると敵機が飛んで来るので、助けてもらうのに大分時間がかかりましたが、やっと助けられ出て来た時には小隊長以下十一名でした。幸い戦友が野戦病院に運んでくれ入院することが出来たのです。丁度その晩、敵の艦砲射撃があり小隊長が、舟艇が気になるから動ける者はいって来いと言われたが、起き上がることが出来ず残念でした。

やっとの思いで後方にさがり、マダン兵站病院へ入院、十一月十一日、ウエワクから病院船で高雄へ、高雄や台北の病院を転々とし、十九年五月大阪へ、六月広島へ、十九年八月十三日柳井で召集解除となりました。柳井では、部隊はニューギニアで全滅したという噂だったので、当時の状況を書いて提出しました。

召集解除になってから軍隊手帳を受け取りました。

しかし今、東ニューギニアの地図を見せてもらいましたが、サラモア、ラエ、フィンシユハーフェン、マダンなどの地名を見ると、当時のことが思い出され涙が出てきます。